

落葉

水野 仙子

おきよさん——あなたには珍しい呼ばれかたかも知れないけれど、きよ子さんなんて呼ぶよりも、私にはどんなにこの方が親しみ^{ほう}を現はせるか知れません。だけどもあそんなことはどうでもいゝとして、在京中は大へんいろいろお世話になりました。私があゝして國にかへることになってから、初めての上京だったので、面白いのやら、嬉しいのやら、悲しいのやら、痛い^{ほう}のやら、なんだか譯のわからない感情を胸いっぱい溜めて歸って来ました。思ひの外早く里心がついたんだねって笑はれましたけれど、自分の病氣なんてことが、なんでもないことのやうに思へてしまつたんですもの。あのことに就ても一方ならぬ御厄介をかけました。はたの者がやいやい申しますけれど、私はどうせ子供なんか要らないんですから……自分の體を自分が打つちやつて置くのに差支もありますまい。私の何もかもを縛つてしまつた人達に、私がどれだけ自由つてものを渴望してるかを知らしてやりませう。私が自分の體を冒して居る病氣すらも、打つちやり放しにして置かうとするほどの自由をね。——なんだか新しいお芝居の臺辭^{せりふ}みたいになつて來ましたね。二週間ばかりの間に、すっかりあなた方にかぶれてしまつたのかも知れませんわ。でも今度の上京で、といふよりはあの博士の診斷で、私の心はずうつと樂になりました。その代りあなた方からは、随分今の私には不必要な刺戟を與へられました。

おきよさん。私はまだ少うし興奮をつゞけてるやうですの、なんぞとまたしても、この帳場でこんな店の名入れの用箋に書くには不つりあひな言葉が出て來ます。私は今あなたにただのお禮状を書かうとしてゐるのではなく、嫁入りと、出産と、人の死んだ話の外には生活のない周圍の中に落葉のやうに朽ちてゆく私が、こなひだ中は、その落葉がひそやかな雨に叩かれるやうなうるほひと響を味はうことが出來たのを——そのセンチメンタルな心を悲しい喜びとして私は斷念してゐます。その情緒をすこしづゝほぐしてみたい、暫くは落葉が雨に打たれる響の心よきに侵^{した}つてみたい。私はかうしてあなたに筆を取りはじめました。こんなことはもう私の一生にはありますまい。落葉は間もなく朽ちて行くのですもの。

おきよさん。今度の出京^{しゅきやう}で一番私の心に残つたものといつたら、河合のエレクトラでもなければ、とんでもない時に眞面目くさつて小さんの口眞似をする此頃のあなたの口つ

きでもなく、黒門町にTさんを訪ねたかへり、スイートポテトを喰べませうといって、あなたは私を風月の二階に連れていらした。その日のことが妙に私の胸に刻まれてゐます。あなたはもう忘れておしまひになつたかも知れないけれど、私はあの大理石のテーブルにふとついた肱ひじの冷たかつたのまでよく覚えてゐます。

あなたは紅茶をお言ひつけになつた。さうして美しいその暖あつたかい色を嚙りながら、あなた方は毎月お催しになる紅茶の會の話などをなすつた。さうしてまた、こんどは初戀會といふ名前にして、みんなに初戀の話させたなら面白いだらうなどと戯談ちやうたんのやうに仰言をっしゃりながら、ふと思ひ出したやうに『Gさんもよくいらつしやるのよ。』と言って、凝乎ちっと私の顔をごろんなすつた。

『さう。私は軽く胸がとゞろくのを覚えながら簡単にかう言ひました。それは、あなた方がいつもさうして若く面白くてあられるのが妬ましいのよりも、Gさんに就てあなたが凝乎ちっと私をごろんになつたその意味に思ひ迷つたからなのでした。

私にこゝに一寸したエピソードをさせて下さい。

昔———といつては少し大袈裟だけれど、私が女作家ぢよさくかのSさんとある郊外に家を持って居た頃、Sさんのお友達でKさんといふ方が時々遊びに見えました。片かたつ方ほのお耳が少し遠いんだとか聞きましたが、そのせいかおとなし過ぎるほどおっとりとした、それはお人柄な方でした。私はSさんを姉さんのやうにしてみましたので、Kさんには少しは遠慮をしいしい一緒にお話の仲間入りをしたり、ドミノをしたりしてよく遊びました。Sさんには外にも二三人男のお友達がありました。みんな厭味のない、方ばかりでした。そしてSさんは男だの女だのって區別を知らないものゝやうに危なげなくつきあはれる方なんでしょう。

ある日、Kさんはつひ話し込んで日を暮らしたのに驚いて『蟲の音がよくしますね。』と仰言をっしゃりながら立上りました。外は眞つ暗な秋よの夜だった。今まで忘れてゐたあたりの寂しさが、急に身にしみるやうに三人は黙つてしまひました。

『ぢやさよなら。』

『さようなら、お氣をつけていらつしやいませ。』

かうした言葉がしんみりとして聞えました。やがて下駄の音がこつこつと小石にあたつて生垣の外に消えてゆきます。Sさんはさつきから青い蔽をほひのあるランプを右の手に高くさし上げて、凝乎ちっとKさんの後姿を見送つて居ました。羽織がなくては少し寒むさうなSさんの立姿たちすがたが、その時如何にも侘わしさうに見えました。私はその時ふと、譯もなくKさんは

私もSさんのために大切にしなければならぬ人のやうに思へました。なんといふことはなくさう思へたのでした。

なんでもないたゞこれだけのお話なんですけれど、やっぱりあとになって聞けば、二人はその頃から戀ひあふやうになつてゐたのださうです。

その通り、こんなことはどうしても知らず知らず外に現はれるものだと思ひますの。それを私は今自分の上にも当て嵌めようとしてゐるのですわ。

私はあなたにGさんのことを言はれて凝乎と顔を見られた時、なんだか胸が安らかでなかつたと申しました。あなたもやっぱり私がSさんに就て感じたやうなことを感じていらしたのではないでせうか？ さうとすれば私はやはりGさんを戀してたのでせうか？ 少くも、あなたの凝視についてそんなことを考へるだけ、私自身も幾分それを認めることになりませうけれど……けれど私はほんとにGさんを戀したのか知ら？

それからあなたは猶、紅茶の會に集る誰彼についてお話をすつた。みんな暢氣さうな、さうして何かしら意義ある話をしあつてる人達の集ひが私の頭に映りました。その中に、久しぶりでGさんの元氣な顔を見ました。それはあの頃よりずっとずっと大人になつた、さうして一層元氣に、一層才走つて來たGさんでした。私は眞實にさういふGさんを見たやうな氣がしました。

と、はじめGさんをあなたに紹介したのは私であつたことなどを思ひ出して、今まであなたが辰ツちゃんと呼ぶほど親しくしてゐらつしやるのが妬ましいやうな、すっかり大學生になりすましたGさんが怖いやうな憎いやうな、不思議な感情が湧いたあとから、何にも先だつて一葉散つたおち葉のやうに、寂しく寂しく自分の身が果敢なまれたのでした。

だけどこんなことを氣にかけて下すつては困りますわ、私は何も彼も思つた通り正直にいつてるのですし、それにいつまでさうした氣分に捕はれてる私でもないのですから。

それから私は、若しもその初戀會といふものが假りに事實になつたとしたら、Gさんはどんな女に就てどんな物語をするのだらうかと、そんなことまで思つてみました。

さうしてまたしても私は、Gさんと私との間に、戀といふ文字が使はれるかどうかと疑ふのでした。

おきよさん。私はこれから私がGさんに對して抱いた心持を、思ひ出し思ひ出しありのままに書きつけてみようと思ひますの。あなたには随分御迷惑なことでせうけれど、さうでもしたら、炙り出しのやうに戀といふ字が出て來るかどうか、せめてまあ一寸お慰みにも。

私が初めてGさんに會つたのは矢來の先生の家でゝした。御存じの通りその時分私は先生の家に御厄介になつてゐました。ある日玄關の鈴の音がけたましくするので急いで私が出て見ると、紺紺こんがすりの單衣ひとへものに袴を裾短かにはいた一人の少年が半開きにした格子戸から、麥桿帽子むぎわらの庇に手を掛けながら、

『私は駒込のGですが先生はいらっしゃいますか。』と齒切れよく言つて、ぢつと私の顔に目を注いで居ます。私は思はず親しみに口許を解きました。さう聞かない前から、必ずさうとひとりでに思はれたのでした。それにその四五日前に、私は先生の代筆で在宅の返事をしてあげたのでした。私はその時『可愛い少年だこと!』と思ひました。Gさんは先生に初対面だったので。すゝめた座蒲團を外してきちんと坐つて、歌の話を何かと先生から聞いてゐました。私にも時々話を向ける態度が如何にもさっぱりしてゐて、さすがに東京ツ子だと思つて私は感心しました。中學を出たばかりで高等學校の試験までにある獨逸語の學校に通つてることなど話してゐました。

その夜、私は例の通り門の郵便函をあげに行くと、一本の封筒がほんのり白くはいつてゐました。なんだかそれがどうしても私宛のであるやうな氣がして、薄暗い軒燈けんとうにすかしてみると案の状私ので、それはGさんからの初めての手紙なりました。『私は十九になります』といったやうな、罪のない手紙で、今日のことや何かを言つた末に、是から私を姉と呼ばせてくれと書いてあります。歸ると直ぐに書いた手紙らしいんです。私はその時二十一でした。男と女の文通の初まりは、姉とか弟とか兄とか妹いふことから初まるに定きまつてゐます。けれども私はGさんの場合にはそんな皮肉なことを考へたくなかつた。その返事には直ぐに『姉より辰吉様へ』と書きました。けれどもちつとも姉らしい氣がしませんでした。それからちよいちよい呉れる手紙の末には、いつも必とよかつたら遊びに来てくれと書いてあります。私はGさんの家とか周囲とかいふものが見たくなりました。それに私が東京に出たばかりの頃で、これつていふ友達も外になかつたものだから、ある日ふつとGさんを訪ねてみる氣になりました。駒込の淺嘉町にやうやうのことで表札を見つけて、敷石に下駄の音を憚はばかりながら玄關に立つて案内を乞ふと、中年増の女が出て來ました。私が出した小さな名刺を不思議さうに持つて奥にはいると、間もなくとんとんと廊下に力強い足音がして、Gさんの丸い顔がひよいと出ました。

『や。』とこつちこつち顔かほを赤くしながら、

『さあどうぞ。』つて、私を庭の方から自分の書齋に廻るやうに教へてくれました。

年下とはいへ、男の友達を訪ねるのなぞは私に初めてだったので、ともすると顔が赤ら

みかけて困りました。重おもに歌の話や、私の國のことやらが話題になったやうに覺えています。と、Gさんは思ひ出したやうに、

『此間の日記をお目にかけてませう。』といって、當用日記の欄外にまで細かく書き入れたその日の日記を私の前に披ひらいて出しました。先生を初めて訪ねた日のことが、細かに書かれてゐる中うちに、こんなところがありました。

『先生はお八重さん お八重さんといつて居おられた。お八重さんはお茶などを持って私達の座敷にはいつて來られた。先生はお八重さんにも貴女もこゝでお話しをなさいと言つた。お八重さんは一寸笑つてそのまゝそこにおとなしく坐つた。思つたよりも若く見える人だつた。髪を桃割れに結つたのが少し頰くわれかけて、白い丈長たけながにうつすらと油が侵しみて居た。お八重さんはお國訛こくなまりのぬけない言葉で、先生や私の話に答へてゐた。笑ふ時には餘計子供らしく見えた。松葉を散らしたやうな中形の浴衣に、下り藤模様のメレンスの帶をお太鼓にしめて、絶えず袂の先であねさまをこしらふやうなことをしてゐた。私はその浴衣の藤のあたりが少し汚れてゐたのが悲しかった。』

私が日記を閉じて笑顔を向けると、Gさんも微笑みながら私の顔を見てゐました。私はいかうまで細かに私を注意してくれる心が嬉しく、それにすべてを美しい目で見てあることが可憐いぢらしいやうな氣もしました。と、そこへGさんのお母さんが柿のむいたのをお皿に盛つてはひつて來ました。私は座蒲團をすべつてお挨拶をすると、丁寧にお辭儀をかへされながら、つとGさんの方に體を向けて、少し問ただひ訊すやうな口調で、

『どういふ方でいらつしやるのかい？』と仰をっしや言ります。此時私は體中の血がかつと頭にのぼるの覺えました。

『M先生の……』と言ひさしながら、Gさんはふつと口をつぐんで、『いゝ、あとで申し上げます。』

お母さんは間もなくそこを出てゆかれました。二人は暫く手持不沙汰に黙り合つてゐました。お部屋の前の庭には、目のさめるやうに眞ッ赤いのと黄色いダーリアが、首をうなだれて咲いてゐました。Gさんが私に氣の獨さうにしているのが私はまた氣の毒で、すぐに起つて歸る譯にもいかず、ぼつりぼつりとした話をしてゐるうちに、もうお晝になつたのみえてお母さんがちらしをお膳にのせて持つて來られました。私はその時ほんとに穴にもはひりたいやうな氣がしました。さぞ圖々しい女と思はれるだらうと思ふと、直ちぐにも暇まひらをつつてかへりたいのを、ぢつと怵おそへて、『お前はあちらでおあがり。』と仰おっしや言るお母さんの後について、Gさんがそこを出て行つてから初めてほつと息をしました。

どうしたってその割箸を裂く氣にはなれなくて、赤い蜻蛉が菊の支へに止まらうとしては止まりかねてゐるのなぞをぼんやりと眺めてゐると、茶の間の方から、お母さんが何か言ひ聞かせるやうな口調で、靜かにものを仰言つてゐるのが聞えて來ます。それについて『はい、はい。』といふGさんの返事が耳に入ると、私の爲にGさんが叱られてゐるのぢやないか知らといふやうな氣がして、益々心が落着かなくなつて來るのです。

その日のことは、私の極りのわるい思ひ出の一つである程力強い印象を残しました。そんなことがまた私の心の上にGさんの影を色濃くしたかも知れませんが、その頃上野には文部省の展覽會が開かれてゐたので、歸りに私はそこに寄りました。そしてもう十分ほどしたら、いつもの學校に行く時刻に家を出るGさんが、あとから見える筈なのを心待ちしながら、見るともなく一枚一枚と繪の前に瞳を投げて過ぎました。けれど、どうか違つたか、會場を出るまで私は再びGさんの姿を見つけることは出來ませんでした。

そんなこんなでその後姉から弟へ行く手紙の上書きは、いつかGさんのお友達の男名前を用ゐることになってゐました。それには私の手跡の男らしいのが丁度いゝのです。そんなことが却て私に不思議な感情を齎し、また好奇心な面白さをも伴はせました。

私がSさんと家を持つことになつてからも、Gさんはちよい遊びに來ました。さうしてSさんにも好かれてゐました。

霜解けのする頃の郊外の道は、まるで泥田のやうに下駄を埋めるのが常だった。殊に私達の住んで居たところは、田圃を越えたりだらだら坂をのぼったりしたところの丘の上にあつたので、買物や風呂に行くのに随分惱んだものでした。或日ひよつこりと思ひ掛けなく丘の家に見えたGさんは、下駄の横緒を踏み切つたとみえて、泥だらけの足をしながら、片っ方の下駄をぶら下げてゐました。何か元氣のいゝことを言ひながら、裏口に廻つてがらがらと井戸の釣瓶を繰つてゐます。雑巾を持つて私があとから出て行くと、Gさんは盥に汲入れた水に足を侵して、無造作にぼちやぼちやと洗つてゐました。冷氣に刺激されて眞つ赤になつた足を、まあ冷たさうにと眺めてゐるうちに、裾短かな袴の下に露はれてゐる二つの脛が、如何にも丈夫さうに、そして如何にも見事に發育してゐるのにふと目をとめて『あゝ、Gさんはもう子供ぢやない！』と思ふと、私はなんともいへぬ寂しさをその時感じました。

『私は駒込のGですが……』と、先生の家の玄關にそのくりくりした顔を出した少年の面影は、ほんの僅かの間に消えてゆきました。がっしりと肩巾の廣い、充實した筋肉を持つた一人の青年をその日から私は見ました。

私はGさんに會ふことを好みました。思ひもかけず道であった場合など、大人げもなく少しばかり顔を赤らめて、その日はなんとなく生々とした気分になれたりしました。けれども二人は、人に隠れて會ったこともなければ思ふとか戀ふとかいふやうな言葉を、一度だつて口にしたことも書いたこともなかった。寝ても覺めても思つてるといふやうなことは勿論なく、たゞ會へば譯もない喜びが私の心を支配しました。

Gさんが新しい高等學校の制帽をかぶつて、意氣揚々と丘の家に訪れて來た頃から、そろそろ憎まれ口を聞き出す四つ五つの子を、年のいかない叔母が見るやうな目で、私はGさんを見るやうになりました。さういふことの外にはこれぞといふ二人に就ての記憶も印象もないけれど、たゞあの春の日のうたゝ寝に、快い眠りを貪つてゐた私を、Sさんが寂しいからといって頻りに呼び起すのを、私は返事ばかりで一向起き上らうともしないでゐました。と、先刻からお菓子を買つて來たからのなんのと言つてゐたSさんが、『あ、Gさんがいらしてよ!』と云ひました。

私は思はずびくりとしました。といふのは、Sさんのその言葉を眞實にした譯ではなく、かう言つたら私が眼をさますだらうと思つたSさんの心に胸が騒いだのでした。

私はもしや……思つて、自分でもはつきりしない心持ちに胸を轟かせながら、わざといつまでも冴えきつた眼をつぶつてゐました。

——おきよさん。序曲はもういゝかげん長くなりました。そしてこれより外に綾ある曲譜を持たない私は、間もなくあなたにさよならをしなければなりません。これをお讀みになるのは、随分大抵な御辛棒ぢやなかつたかも知れません。かにして下さいませぬ。

多分Gさんにはもう戀がありませう。その戀はれる人、或は戀ふてる人は、どんなに美しい、そして可愛い方でせう？ あなたは必と御存じでいらつしやいませう。私はその人達を心から祝福したいと思ひます。

あなたはどう思つて下さるかも知れないけれども、たとひGさんと私との交りに戀らしい彩りが見えたとしても、それは私にとってたゞ寂しさを添へるに過ぎないのです。私はGさんよりも二つ年上でした。それに、あなたも御存じの通りどちらかといへば男らしい氣象をより多くその性のうちに持つてゐますので、そろそろ異性に興味を持ちはじめた少年の眩しく近づき難い惑はしさもなく、際だつた異性の感じの薄いところが、その時分のGさんを近づかしたのではないかと思ふことは、私にとって一つの寂しさでなくてなんでせう？

けれどもみんなもう昔のことです。色もなく香もなく、たゞ霜をまつばかりの運命をもつ落葉が、私の身の上なのですから。

私は大分疲れて來ました。肩の凝りの解けたやうな、それと共になんともいへぬ倦るさを覚えるやうな——私は早くこの手紙を書いた氣分のぬけ去らないうちに、一人の田舎の店屋のかみさんに心持のかへらないうちに、早くこの筆を擱くことにいたしませう！ではさようなら、おきよさん——

入力者注… 以下の漢字は訂正しました。

夜來↓矢來

人偏十卷↓倦

以下の漢字は原文のまま入力しました。

侵した(浸)

泥田ぬまた(沼田)

底本…「水野仙子全集」第三卷

初出…「新日本」大正二年十一月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年七月三十日